

曲直瀬道三の‘運氣論’研究

町 泉寿郎

二松学舎大学

曲直瀬道三(1507~1594)は、旅先の琵琶湖や浜名湖の畔で脈の診断によって落雷や山崩れを予知して災難を逃れたり、また毛利元就の脈を診察して5年後の発病を予測したと伝えられている(『今大路家記抄』)。道三の医学は、診脈等の診断によって病因を弁別し、病証に応じた治療法を組み立てる、診察と治療の精緻な構成をその特徴とする。その道三の医療を理論的に支えた運氣論に着目して、遺された資料から道三が運氣論をどのように理解していたかを追究する。

運氣論の根拠となった『素問』運氣七篇は、五代~宋代の後補にかかると思われる(范行準・山田慶児)。道三の関東遊学時代(1528~1544)、在学した足利学校は易学で定評があったし(『周易』の解釈を教える「正伝」と占筮を教える「別伝」があった)、『素問』が講じられていたこともほぼ疑いない(国立公文書館所蔵・周田校本『素問』)。道三自身は25歳(1531)で導道(1465<一説に1462>~1536生存)から『素問』を学び、30歳で三喜(1465<一説に1462・1473>~1537<一説に1544>)から奥義を伝授されたと述べており(杏雨書屋『当流医学之源委』)、関東遊学中に運氣論に触れた状況証拠はある。

39歳(1545)で関東遊学から京都に戻った道三は、開業の傍ら古典や自著を講釈して名声を博した。道三が講釈したテキストは、以下の通り儒書・仏書・国書を含む26種にのぼる(*は自著)。『難経』、*『全九集(真名本・仮名本)』、『本草序例』、『医方大成論』、*『十五卷(十五指南篇)』、*『切紙』40通、『察病指南』、『医学源流』、『和剂指南』、『運氣論』、『新本草古文序』、『明堂灸経』、*『丑時(老師雑話)』、*『日用薬性能毒(大・小)』、『明医雑著』、『医学正伝(或問)』、『崔真人脈訣(東垣十書序)』、『職原抄』、*『雲陣夜話』、*『茶話』、*『山居四要拔萃』、*『啓迪集』、『心経』、*『正心集』、『三体絶句』、『論語』、『三略』。

その講義した「運氣論」とは、宋・劉温舒『素問入式運氣論奥』(1099序)のことと考えられる。道三の関与が明白な『運氣論奥』には、写本『新刊素問入式運氣論奥』(武田科学振興財団杏雨書屋、貴236)がある。同書は、その本文は道三の筆蹟ではないが、巻末に「右一部、依懇望而許之書写之、即/逐一覽、染老筆畢、/亨徳院一谿道三(花押)/慶安老学士」と道三の自筆奥書があり、本文中や欄外に道三の書入が散見される。本文は半丁9行15字で書写され、元刊本(14行23~24字)、元刊本素問靈枢(8行18字)、明熊宗立本素問靈枢(13行23字)、朝鮮活字本素問(10行18字)等と行格は異なる。

また、国立公文書館には、『運氣論奥』を講釈する際に作成されたかと思われる、室町写本『運氣私抄』(特112-5、江戸医学館旧蔵)1冊が所蔵される。奥書等がなく、講義者・編者・書写者が不明なため、同館の国書分類目録でも特に編著者を記さない。しかし、その字様や書型・用箋(22.4×26.8、淡墨の烏絲欄18.1×22.0)から、所見では道三自筆と判断される。本文全ては掲げず、注解する語句のみをあげて注解する形態をとる。劉温舒自序と本文第1~第30までを収め、附録の第31は収めない。但し巻頭部分には錯簡がある。ごく一部を除いて注解は漢文体で、全編に同筆により返点・送仮名を施す。若干の訂正箇所はあるが大きな修正はなく、脱稿した姿を示す。先行著作の重鈔本の可能性も無くはないが、恐らくは道三の述作にかかるものであろう。依拠した底本は、劉温舒自序の注解箇所に「書堂重刊」とあることから、前掲の元刊本、または元刊本に拠る朝鮮活字本かと思われる。著述時期は未詳ながら、原表紙(もと包背装を線装に改装か)と見られる、故紙を再利用した裏表紙に、「周易之本卦/天正十一(1583)癸未年九月十七日/……」と記されているのが参考になる。従来、室町期に遡る『運氣論奥』の抄物としては、吉田意安『運氣一言集』(東京理科大学・下浦文庫、1542年奥書写本、後1654刊)が知られているが、本書は図表を多く用いて運氣の理論を説いている点に特色がある。道三自筆の抄物として極めて貴重であるだけでなく、単に言葉の解釈にとどまらず理論の把握に努めた、その注解の内容の点から評価すべきである。

(本報告は、学振科研費(基盤研究C)課題名「漢籍抄物を中心とした中世末期~近世初期の学術展開に関する基礎的研究」(課題番号:22520049代表者 町泉寿郎)による研究成果の一部である。)